

Title	京大広報 No. 706
Author(s)	
Citation	京大広報 (2014), 706: 4309-4328
Issue Date	2014-12
URL	http://hdl.handle.net/2433/196364
Right	
Type	Others
Textversion	publisher



京大広報

No. 706

2014.12



第9回京都大学ホームカミングデイ —関連記事 本文4312ページ—

目次

〈大学の動き〉

- 第60回京都大学未来フォーラムを開催……………4310
- 第2回日墨学長会議に稲葉カヨ 理事・副学長が出席……………4310
- 第20回 AEARU 年次総会に湊 長博 理事・副学長が出席……………4311
- 第9回京都大学ホームカミングデイを開催……………4312
- 京都賞高校フォーラムを開催……………4313

〈部局の動き〉

- 医学部附属病院において高磁場 3 テスラ MRI 手術室システムが稼働……………4313

〈資料〉

- 平成26年度 総長裁量経費による採択事項……………4314

〈寸言〉

- 人生で一番輝いているとき、
良き師と出会うところ 小長谷 有紀……………4315

〈随想〉

- 「末期」高齢者の辯
名誉教授 川那部 浩哉……………4316

〈洛書〉

- 道具を使う力 加納 学……………4317

〈栄誉〉

- 野田 進 工学研究科教授、西村いくこ 理学研究科教授が紫綬褒章を受章……………4318

〈話題〉

- 日本学術振興会研究拠点事業「インドシナ地域における地球環境学連携拠点の形成」第2回国際シンポジウムを開催……………4319
- 花山天文台で野外コンサートを開催……………4320
- 「竹の環(わ)プロジェクト」を開催……………4320
- 教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座「創造性と心の発達」を開催……………4321
- 地球環境学堂・学舎がレスター国立大学地理学部との部局間学術交流協定を締結……………4322
- 「フューチャー・アースに貢献する国際研究ネットワーク・ハブ構築」のシンポジウムを開催……………4322
- タイ王国 Mahidol 大学工学部長と5学科代表が本学を訪問……………4323
- 宇治キャンパス公開2014を開催……………4324
- 宇治キャンパスで総合防災訓練を実施……………4325
- 平成26年度総長杯(卓球大会)を開催……………4325
- 〈計報〉……………4326

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

第60回京都大学未来フォーラムを開催

10月24日(金)、本学文学部卒業生で作家のいしいしんじ氏を講師に迎え、京都大学未来フォーラムが百周年時計台記念館において開催された。

講演の中で、いしい氏は、これまでの作品にまつわる様々なエピソードに触れながら、自身にとって小説を書くということは呼吸をするのと同じように



会場の様子

していることであり、自分で気付かないまま自らの置かれた状況を書くということが「呼吸する小説」ということなのかもしれないと語られた。

参加者からは「いしいさんの生き方・



講演をするいしい氏

感じ方が書くという仕事につながっているのだと思いました」、「いしいさんの人となりがわかり、哲学的なものを感じました」、「内と外の話、中間領域で人と出会うという話が大変興味深かったです」、「人間の心の底にある真髓が見えた気がしました」などの感想が寄せられた。

(渉外部)

第2回日墨学長会議に稲葉カヨ 理事・副学長が出席

メキシコのグアナファト市およびアグアスカリエンテス市で10月27日(月)、28日(火)に第2回日墨学長会議が開催され、本学から稲葉カヨ 国際・広報担当理事・副学長、学術研究支援室のURA、研究国際部職員の計3名が参加した。

本会議は、日本・メキシコ両国における大学間交

流の促進を図ることを目的に、第1回目は平成23年に東京大学で開催され、第2回目となる今回は、日本から27大学・機関、メキシコから52大学・機関の学長・副学長等、また、11の日系現地企業の関係者が参加し、高等教育分野における協力、イノベーション、産学連携、グローバル化時代における人材育成、日墨文化関係の発展等について活発な議論が行われた。

1日目のグアナファト大学での開会式には各大学の学長・副学長の他、ホセ・アントニオ・ミード・クリブレニャ メキシコ外相、ミゲル・マルケス グアナファト州知事、目賀田周一郎 駐メキシコ特命全権大使、前川喜平 文部科学省審議官が出席、両国の大学間協力の重要性を語り、基調講演と四つのパネルセッションが行われた。

2日目のアグアスカリエンテス自治大学での会議には、カルロス・ロサノ アグアスカリエンテス州知事他のスピーチの後、「グローバル化時代におけ



グアナファト大学での開会

る人材育成」に関するパネルセッションが行われ、稲葉理事・副学長が「Academic Freedom and Global Excellence」と題した講演を行い、本学の国際戦略「2x by 2020」、博士課程教育リレーディングプログラム、スーパーグローバル大学等事



稲葉理事・副学長の講演

業「京都大学ジャパングートウェイ構想」等、本学での人材育成のための様々な取り組みを紹介した。

閉会式では双方の出席大学の連名で共同声明が発表され、今後の両国間の教育・研究連携推進とともに、産官学が一層の協力強化・連携を図ることが表明された。また、現地ではメディア取材も多く、開催直後に外務省、州政府、大学等で記事や動画が公開される等、本会議への関心と期待の大きさがうかがえた。

(研究国際部)

第20回 AEARU 年次総会に湊 長博 理事・副学長が出席

本学が加盟するAEARU(The Association of East Asian Research Universities: 東アジア研究型大学協会)の第20回年次総会が10月31日(金)に中国の南京大学で開催され、本学から湊 長博 研究担当理事・副学長、研究国際部職員1名の計2名が出席した。



総会の様子

AEARUは東アジアにおける知の創造および学術交流の促進のために結成された大学協会で、日本・中国・韓国・香港・台湾を代表する17の大学が加盟している。年間を通じて各種研究ワークショップ、学生サマーキャンプ等の事業を実施しており、年1回の総会には各加盟大学から学長・副学長が出席し運営等について討議を行う。

総会では最初に、議長である陳駿 南京大学長の議事進行のもと、昨年度年次総会以降の加盟大学長の交代について説明があり、本年9月まで本学総長として事業に積極

松本前総長への感謝状贈呈の様子
(左から、陳学長、湊理事・副学長)

的に参画、また議長、理事も務めた松本 紘 前総長のAEARUへの貢献に対し感謝状が贈呈された。

次に平成26年度に開催したワークショップ、学生キャンプ等のAEARU事業について各大学からの報告、平成27年の事業計画紹介、財務報告とLERU (League of European Research Universities) との連携状況報告等が続き、審議事項としては延世大学(韓国)の新規加盟が承認された。

総会の後半では、ゲストスピーカーと加盟4大学からのプレゼンテーションが行われ、研究大学としての様々な活動紹介に続いて各加盟大学の学長・副学長が活発な議論と情報交換を行う機会となった。

(研究国際部)

第9回京都大学ホームカミングデイを開催

11月1日(土)に「食 ～京料理の伝統と科学～」をテーマとし、「第9回京都大学ホームカミングデイ」を百周年時計台記念館 百周年記念ホールにて開催した。同窓生(卒業生, 修了生, 元教職員), 教職員, 学生など延べ約2,800名の参加があった。



挨拶を行う山極総長

はじめに、山極壽一 総長(本学同窓会会長)から、大学は、多くの優秀な人材の旅立ちを支援し、送り出す窓であること、そして、本年ノーベル物理学賞を受賞された赤崎 勇博士(理学部・昭和27年卒)を始める多くの同窓生がその窓から羽ばたき、活躍されていることに感謝しているとの挨拶があった。

続いて、京舞 井上流による同窓生の長寿繁栄を願った「老松」の披露に次いで、料亭 菊乃井の主人



上から、講演を行う村田氏、伏木教授

である村田吉弘氏の「和食と日本料理、日本料理と京料理、それぞれ一体何が違うのか」、伏木 亨 農学研究科教授の「和食のだし；おいしさの科学と次世代への継承の重要性」と題した講演があった。村田氏の食にまつわる豊かな知識と経験に基づいた話、そして伏木教授の日本のだしの美味しさなどを学術的に捉えた話は大変興味深いもので、参加者は魅了され、熱心に聞き入っていた。

講演会後の、老舗料亭の京料理(京弁当, 煮物碗)を味わうイベントや、百周年時計台記念館前庭のクスノキを中心に飲食等の屋台を展開した「クスノキ屋台村」など、例年にない新しいイベントが好評を博し、特に「クスノキ屋台村」では、ホームカミングデイ限定のオリジナル菓子の販売や学生の屋台やパ



京料理を味わう会場風景



クスノキ屋台村

フォーマンスなどがあり、多くの参加者で賑わった。

音楽会では、京都大学交響楽団による「ニュルンベルクのマイスタージンガー」、「ハンガリー舞曲第5番」、「踊る仔猫」、「カルメン」の演奏があった。

また、登録有形文化財の尊攘堂や附属図書館の施設見学、総合博物館企画展「学問の礎を受け継ぐ－文科大学陳列館からの出発－」と特別展「地の宝－百年を越える眠りからさめる旧制三高・京都帝大時代の秘蔵鉱物コレクション－」にも多数の参加者があった。

このほか、京大サロンでは、京都の企業経営者24名(同窓生)を招き、経営者同士や本学教員との交流を深める会が、また、百周年時計台記念館や楽友会館等では、学部・研究科等同窓会や地域同窓会の講演会・懇親会などが開かれた。国際交流ホールでは、「OB・OGと学部学生・大学院生との交流会」を開催し、若手卒業生と現役学生が就職をテーマに熱心に意見交換をするなど、大変賑やかな一日となった。

次回は平成27年11月7日(土)に開催する。

(渉外部)

京都賞高校フォーラムを開催

11月13日(木)、百周年時計台記念館において、公益財団法人稲盛財団との共催により、青少年育成プログラムの一つとして、第30回京都賞高校フォーラムを開催した。

青少年育成プログラムとは、同財団が主催する京都賞授賞式および関連行事の期間(京都賞ウィーク)において実施される、小学生から高校生、大学生などの若い世代を対象にしたプログラムで、本学はその一部を同財団と共催している。

当日はフォーラムに先立ち、京都賞基礎科学部門

数理科学分野受賞者のエドワード・ウィッテン 博士夫妻と稲葉カヨ 広報担当理事・副学長、稲盛豊実 稲盛財団専務理事が懇談した。

フォーラムでは、稲盛専務理事による開会の挨拶の後、ウィッテン博士より「粒子、波、そして弦へ」と題した講演が行われ、出席した京都府内の高校生約400名が熱心に聞き入った。

その後、ウィッテン博士と高校生との質疑応答が行われ、活発なやり取りがあり、最後に稲葉理事・副学長が挨拶を行い、盛会のうちに終了した。



ウィッテン博士夫妻との懇談



会場の様子

(渉外部)

部局の動き

医学部附属病院において高磁場 3 テスラ MRI 手術室システムが稼働

医学部附属病院は、10月30日(木)より、国内で初めてとなる高磁場 3 テスラMRI手術室システムの稼働を始めた。

同病院では、高度な外科医療を支援できる術中画像診断システムとして、統合型高性能画像診断サーキットintegrated Smart Imaging Circuit (iSIC)を手術室に設置する事業を進めている。今回、その一環として、国内で初めて高磁場 3 テスラMRI手術室システムの稼働を始めた。

脳神経外科・脊椎外科・頭頸部外科においては、高度な技術と修練を要するハイリスクな手術が増加している。MRIは、コントラスト分解能が高く、様々な撮像法が可能であり、手術中にMRIでリアルタイムに術中診断を行うことは、手術精度の向上、合併



高磁場 3 テスラMRI手術室

症の回避に非常に有用である。国内では、すでに低磁場MRIを設置した施設で術中MRI撮像を用いた手術が実施されている。最近、海外の施設では、高磁

場 3 テスラMRIを手術室に設置し、精度の向上だけでなく、高磁場で可能となるハイレベルな手術に応用されているが、未だ国内では高磁場によるリスクもあり、設置する施設はなかった。しかし、高磁場 3 テスラMRIは、診断画像や脳機能画像を撮像するスタンダードな機器となっており、手術支援として 3 テスラMRIの設置が望まれていた。

本手術システムの特徴は、高磁場 3 テスラMRI装置を手術エリアに設置し、術前・術中・術後のMRI撮影を迅速に行い、正確な手術の支援ができることである。連動する最新のナビゲーションは、術中のMRI画像を 3 次元構成し、リアルタイムに標的臓器

を立体的に把握することが可能である。さらに、高磁場で可能となる脳機能画像(脳機能マッピング)・MRスペクトロスコピー(生体内分子解析)・トラクトグラフィ(神経線維画像)といった最新の撮像法を用いた手術を予定している。

同病院では、高磁場 3 テスラMRI手術室、昨年から稼働した次世代型ハイブリッド手術室、今後設置予定の移動型CT手術支援システムを連携させることで、治療に伴う患者の負担軽減と機能改善・温存を目指して治療困難な疾患に取り組んでいく。

(医学部附属病院)

資料

平成26年度 総長裁量経費による採択事項

平成26年度の総長裁量経費については、採択済の26件に加え以下の16件が採択された。
採択事項および対象部局等は次のとおりである。

プロジェクト等事項名	部 局 名	関 連 部 局
外国人学者の招聘による集中講義	理 学 研 究 科	
医学研究科・医学部教員を対象とした国際ファカルティ・ディベロップメント推進事業	医 学 研 究 科	
人間健康科学インターナショナルフォーラム	医 学 研 究 科	
「遺伝リテラシー向上のためのプログラム/教材開発」事業	医 学 研 究 科	
ネット動画サイトを利用した薬学最先端研究成果の紹介・解説の学外への発信	薬 学 研 究 科	
大学院学生のキャリアパス形成支援	薬 学 研 究 科	
国際環境リスク管理教育・研究拠点整備事業	工 学 研 究 科	
「魅力・活力・実力ある京都大学」を支える光・電子理工学人材育成プログラム	工 学 研 究 科	
専任教員によるアジア・アフリカ地域研究欧文出版助成	アジア・アフリカ地域研究研究科	
ロンドン大学クイーン・メアリー(Queen Mary, University of London)との国際共同研究事業	情 報 学 研 究 科	
研究会・セミナー等研究活動に関する情報発信事業	基 礎 物 理 学 研 究 所	
ウイルス生命科学分野における国際人材育成教育プログラムの構築	ウ イ ル ス 研 究 所	
若手研究者の国際的主導権強化支援事業	経 済 研 究 所	
マイクロフィルム電子化による貴重資料のデジタルコンテンツの拡充	学術情報メディアセンター	農学研究科, 人文科学研究所, 東南アジア研究所, 大学文書館
東日本大震災復興関連研究及び支援活動に係る学生を対象とした放射線防護教育	事 務 本 部 (施設部(環境安全保健機構))	
「京都大学新聞」バックナンバーの京都大学学術情報リポジトリへの掲載	事 務 本 部 (学 務 部)	

(財務部)

寸言

人生で一番輝いているとき、
良き師と出会うところ

小長谷 有紀

数年前、職場でめまいがして早退した。なにかの病であっては困るので、近所のかかりつけの医院に出向いた。ワーカホリック(仕事中毒)気味と自己分析している私としては、「過労ですね」と言ってもらいたかった。「少しゆっくりされたらどうですか」とでも声をかけてもらいたかった。



ところが、である。いくつかの質問、たとえば「そのとき耳鳴りはしましたか?」といった質問を通じて大病ではないことを確認した医師が私に告げたのは「ろうかです」。

え?「廊下?」。あ!「老化!」。私は思わず大笑いした。「かろう」と「ろうか」は同じ音の組み合わせなのに、大違いである。そうか、老化かあ。

件の医師はパソコン画面上に映し出されたグラフを指し示しながら、人間のあらゆる生物学的機能は30代からすでに衰退していることを説明してくれた。もうずっと前から老化しているのだから、もはや今さら如何ともしがたいのである。もちろん、個人差はあるだろうが、じたばたしても始まらないのだ。

さて、ということは、学生時代というものは生物学的に見ると人生で一番輝いているときということになる。

私自身は、高校を卒業してから大学院博士課程を単位取得退学するまで、途中、モンゴル人民共和国(当時)に留学した1年を加えて、ちょうど10年にわたって京都大学に在籍した。あるいはまた、1986年4月、男女雇用機会均等法の施行と同時に文学部の助手を勤めることになったので、国立民族学博物館に異動するまでの1年と1ヶ月を加えて、ほぼ10年京都大学で暮らしたと言ってもよい。いずれにせよ、18歳からの10年間、生きものとしての機能が最も充

実していたに違いない時期を京都大学で過ごしたのである。

だから、私は言いたい。学生みなさん、悔いの無いようにしっかり学び、たっぷり遊び、すばらしい時間を謳歌してください。そして、教職員のみなさんにも言いたい。ぴかぴかの若者たちにいつも接していただけるなんて、なんてすてきなことでしょう。学生のためにエネルギーを注ぐ一方で、実は大いなるエネルギーを学生からもらっているのではないのでしょうか。どうか、学生たちの良き師となってください。

私の場合、本当に良き師に恵まれたと思う。ここで良き師というのは、必ずしも人生の方向を決するような恩師だけを指しているわけではない。

たとえば、教養部時代のロシア語の先生は、授業中にしばしばご自分の山登りの体験を話してくださいました。私は登山とは無縁の者だが、大学院時代にヨットに乗り、海に親しみながら、自然との調和をからだで覚えた。いま、改めて思い返すと、授業中のいわゆる無駄話が、私にとっては無駄なく吸収し、生きかたの一つのモデルになったのかもしれない。

また、文学部時代のサンスクリット語の先生は、語彙の一つ一つを丹念に説明してくださいましたから、ことばの背後にある文化を考える道筋を学んだように思い出される。

正規の授業ばかりではない。漢籍に関する素養の無い私に、特別授業で史料を読む訓練を施してくださいました、人文研東方部の先生も、そのための紹介の労をとってくださいました人文研西洋部の先生も、皆、良き師として思い起こされる。ありがとうございます。

後年、モンゴル研究に没頭するようになると、師との出会いは専門分野に限られてしまった。学生時代、大学こそは、専門に限らず、あらゆる面での良き師と出会うところだったと思う。

(こながや ゆき 人間文化研究機構・理事、昭和56年文学部卒業、昭和58年文学研究科修士課程修了)

随想

「末期」高齢者の辯

名誉教授 川那部 浩哉

歳をとると、昔のことを思い出すものらしい。

1955年に大学院へ入るとき、3年間行われてきた「アユ放流基準密度」の調査研究をしないかと誘われた。故原田英司さん(理学部瀬戸臨海実験所長で停年退官)と私は、それに注文を付けた。当時の教授、宮地傳三郎さんの著『アユの話』によれば、「二人の大学院学生は、“グループの研究史は過去二、三年にわたっても、個人の研究史はこれから始まる所だ”というわけで、予定された研究テーマに不服をとえ、“アユの自然史から始めたい”といってきかない。そこでアユが天然に海から上る川を一本とって、“川へ上ってから川口で死ぬまでの間、その川のいろいろな淵を、いつどのように利用するか”をしらべようという所で、委託研究の目的と二人の言い分とを折り合わせることにした」。

1958年からは中海・宍道湖の干拓・淡水湖化の、61年からは琵琶湖総合開発の、いずれも「魚族への影響調査」を宮地さんのもとで手がけることにもなり、日本列島各地の大学などから数十人が集まった。弟子や<お友達>以外の研究者を広く集めたものとしては、本邦最初だったという。また、「各水域の生態学研究が精緻に進めば、影響などはおのずから明らかになる」として、研究は純粋科学として進んだ。若い研究者が常に集まって研究方針や具体的調査の原案を出し、それを全研究者が論議して進めたのである。

その後、私は、タンガニイカ湖の国際共同研究に携わったり、生態学研究センターの設立に関与したりしたが、いずれにおいても、純粋科学として仕事を進め、若手を中心とする中核的な集団が原案を提出し、それを関係するすべての人びとが徹底して論議し、その結果によって進め、かつ検証して行った。この手順は、この時期に学んだことだと言ってよい。

タンガニイカ湖の研究については、日本ではなく



現地アフリカの研究者が主導してくれるように、できるだけ工夫を凝らした。また、生態学研究センターは、全国国立大学共同利用研究機関たる特色を大いに活かそうと、これまたかなり努力した。学外の人びとが参加できるのは運営委員会だけだが、これは規則上諮問機関と位置づけられている。しかし、それを実質的な決定機関とし、さらに異なる意見を持つと思われる人を数多く選定するように努めた。その結果、少なくとも議論の最初には、すべての問題に異見を挟んでくれる人もいた。会議の時間はいくらか長くなったが、少なくとも国内の生態学界からはその人事も含めて、「自分たちのセンター」として盛り立てて貰える結果になったのである。

ところで<大学紛争>のとき、ヤスパースさんの『大学の理念』を読んだ。感心するところはあまり多くなかったが、総合大学(Universitaet)と単科大学(Hochschule, Institut)の違いを論じ、「実学ないし応用科学は後者に委ねるのが至当だが、工学は今や他にはない方法論が確立しているので、前者にも小さい規模で含めるのが望ましい」との意見には、日本の総合大学の設立以来のありかたと対比して、一驚した覚えがある。

のちに「21世紀COEプログラム」に関係したとき、特許数を成果として記すことに抵抗を覚えた。いや、そう言っでは誤りかもしれない。特許とはものの本には、「発明の公開の代償として、独占的利用を認めること」とあるが、私が気にしたのは、「特許のために結果の詳細な公表は遅れる」との発言だった。これでは、「学問の成果は直ちに公開され、万人がそれをも対象に研究を進めることこそ肝心」との基本的なあり方に抵触するのでは、と思ったのである。特許制度は、少なくとも狭義の学問とは折り合いの悪いものなのではないか、などとも…。最近の<事件>を聞くにつけても、この疑問は拡がるばかりだ。

繰りごとになったようだ。自然と社会の不順から離れ、頭を快活にしたいものである。

(かわなべ ひろや 平成8年退職 元理学部／生態学研究センター教授・センター長 専門は群集生態学・生物文化多様性論)

洛書

道具を使う力

加納 学



「学術研究を深めるのではなく、もっと社会のニーズを見据えた、もっと実践的な、職業教育を行う。そうした新たな枠組みを、高等教育に取り込みたいと考えています」と安倍内閣総理大臣がOECD閣僚理事会で基調演説をされたのが今年5月のことです。文部科学省では10月に「実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の制度化に関する有識者会議」が開催され、ある委員が提出した資料が衆目を集めました。「我が国の産業構造と労働市場のパラダイムシフトから見る高等教育機関の今後の方向性」と題されたその資料では、世界をグローバル経済圏(Gの世界)とローカル経済圏(Lの世界)に分けた上で、日本においてLの世界の生産性を向上させるために、L型大学における職業訓練の展開が必要であると説明されています。特に耳目をひいたのが、L型大学で学ぶべき内容です。例えば、文学・英文学部では「シェイクスピア、文学概論」ではなく「観光業で必要となる英語、地元の歴史・文化の名所説明力」を学ぶべきであり、工学部では「機械力学、流体力学」ではなく「TOYOTAで使われている最新鋭の工作機械の使い方」を学ぶべきという内容です。海外から来てくれる知己に京都を案内するとき、いつも質問に答えるのに窮してしまうため、「日本文化を英語で紹介する事典」が本棚に置いてある身としては、耳の痛い指摘です。それでも、機械系の学生と接している大学教員にとって、機械力学や流体力学を教えるのはもういいからと言われると、今年の漢字に「驚」を推薦したくなります。「およそ理論を無視したものなら、そのようなものを技術とは呼ばないよ」とプラトンがソクラテスに語らせていますが、道具の使い方を学ぶだけでよいのでしょうか。

もちろん学生は理論だけでなく道具の使い方も学

びます。研究も含めて、プロジェクトを効率的に進めようとするれば、道具を適切に選んで使えなければなりません。マサチューセッツ工科大学(MIT)化学工学専攻の大学院プログラムであるプラクティススクール(以下PS)は、1916年の設置以来、多くの学生を世界各地の企業に送り込んできました。学生は2ヶ月間に及ぶ企業でのプロジェクトに計2回(合計4ヶ月)参加します。もう10年以上前になりますが、三菱化学水島事業所がPS開催地の一つになったとき、夏休みの1ヶ月間を利用して引率教員として学生と一緒に参加させていただきました。そのときの成果について、スポンサーとなった部署の75%が技術的進歩や教育効果があったとし、さらに30%が実際にブレークスルーがあったと報告しています。そのPSで感心したことの 하나가、MITの学生が専門分野の基礎知識だけでなく、様々な分野のソフトウェアを活用する能力をよく身に付けていることでした。

私は様々な産業の製造プロセスを対象として、製品品質を推定したり、制御したり、異常を検出したりする研究に取り組んでいます。最近では医療データの解析も手掛けていますが、研究室内でよく利用するソフトにMATLAB[®]があります。分野を問わず、大学においても企業においても国内外で広く活用されているソフトで、ハーバード、オックスフォード、スタンフォード、ケンブリッジ等の世界ランク上位大学をはじめ、韓国でもソウル大学校(SNU)や韓国科学技術院(KAIST)等がキャンパスライセンス契約を締結し、研究だけでなく講義でも活用しています。学生が1人1台ノートパソコンを持つような時代ですから、このような道具を取り入れられれば、京都大学の教育も随分と変わるのではないのでしょうか。約20年間、京都大学MATLABユーザーズグループの事務方として草の根活動をしてきた今、道具を活用する新しい教育の作法にも期待を寄せています。

(かのう まなぶ 情報学研究科教授 専門はプロセスシステム工学)

荣誉

野田 進 工学研究科教授、西村いくこ 理学研究科教授が紫綬褒章を受章

このたび、わが国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、野田 進 工学研究科教授、西村いくこ 理学研究科教授が11月3日(月)に紫綬褒章を受章された。以下に両教授の略歴、業績等を紹介する。

野田 進教授は、昭和57年京都大学工学部を卒業、同59年同大学院工学研究科修士課程を修了、三菱電機株式会社中央研究所主員を経て、同63年4月京都大学工学部助手に採用され、平成3年に京都大学博士(工学)の学位を授与された。平成4年同助教授、同12年5月大学院工学研究科教授となり、同21年4月より工学研究科附属光・電子理工学教育研究センター長を併任して現在に至っている。

同教授は、永年にわたって、光量子電子工学の教育、研究に努め、中でも、光の自在な制御を可能とする新しい学問分野「フォトリック結晶工学」の創成、発展に尽力してきた。

21世紀は光の時代と言われている。太陽エネルギーの利用、光の高速性を活かした通信・情報処理、高効率発光デバイス・照明、光製造、さらには量子情報に至るまで、光が担う役割はますます重要となっている。同教授の最大の功績は、このような21世紀を支える「光」を自在に操る学問分野「フォトリック結晶工学」を創成するとともに、その実社会への展開を可能にした点にある。フォトリック結晶とは、周期的な屈折率分布をもつ光ナノ構造を意味



し、光の存在を許さないフォトリックバンドギャップをもつことを特徴とする。これにより、通常の間自由空間とは全く異なる光現象・効果を導き出すことが可能となる。同教授は、このようなフォトリック結晶を世界に先駆けて実現するとともに、様々な新しい光制御の概念を提唱・実証、さらには実用化への道を開いた。

これらの業績に対して、国内ではIBM科学賞、電子情報通信学会エレクトロニクスソサイエティ賞、大阪科学賞、応用物理学会光・量子エレクトロニクス業績賞、同フェロー称号、文部科学大臣表彰(研究部門)など、国際的にはベルギー・ゲント大学より名誉博士号、アメリカ光学会のJoseph Fraunhofer Award / Robert M. Burley Prize, IEEE Distinguished Lecturer Award, IEEEナノテクノロジーパイオニア賞、IEEEフェロー称号などが授与されている。

以上のように、同教授は、光量子電子工学に関する教育・研究、特にフォトリック結晶工学の創成、発展に尽くしたものであり、その功績は誠に顕著である。このたびの紫綬褒章受章は同教授のその功績が高く評価されたものであり、まことに喜ばしいことである。

(大学院工学研究科)

西村いくこ教授は、昭和49年3月大阪大学理学部を卒業、同54年3月に理学博士の学位を取得された。平成3年11月岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所助手、同9年10月同研究所助教授を経て、同11年10月から本学大学院理学研究科教授として生物科学専攻の植物学系植物分子細胞生物学研究室の運営にあたり、現在に至っている。

この間、同教授は、植物科学の研究と教育に努め、特に植物の細胞生物学の分野で多くの傑出した業績を挙げている。

同教授らは、植物が示す様々な生命現象を細胞内膜系の機能分化から解き明かしてきた。具体的には、植物の細胞内の小器官PAC小胞やERボディを発見し、それぞれ大量のタンパク質集積機構や植物独自の生体防御機構としてこれらの研究分野に新しい風



を巻き起こした。細胞内膜系の機能分化を支える因子として発見・命名された液胞プロセッシング酵素VPE/AEPや液胞選別輸送レセプターVSRも、植物病理や小胞輸送の分野にブレークスルーを与えた。特に、VPE/AEPの研究は、植物細胞の分野のみならず動物細胞の分野にも影響を与えることになった珍しい例といえる。また、細胞内最大のネットワーク構造である小胞体の高速流動の発見は、200年来の植物科学の謎である原形質流動の原動力に迫るものとして評価された。平成22年に発見されたストマジェンは、大気中CO₂の生物界への取込み口ともいえる葉の気孔の密度を上昇させる因子として注目を浴びている。

このように同教授は、植物細胞生物学という枠を越えて、植物個体の生体防御や環境応答にまで幅広い視点からの研究を展開し、多くの独創的な研究成果を生み出すとともに、植物科学の分野間の垣根を越えた研究の推進に貢献した。

これらの植物細胞生物学分野の業績に対して、平成18年5月中日文化賞、平成25年3月文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)、日本植物生理学会賞などをそれぞれ受賞した。同教授は、平成26年1月から一般社団法人日本植物生理学会会長の要職につき学会活動に貢献している。また、文部科学省文化審議会委員、同省科学技術・学術審議会専門委員、同省国立大学法人評価委員会専門委員、内閣府総合科学技術会議専門委員、農林水産省農林水産技術会議

専門委員、日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員などを歴任し、国内の科学技術の発展にも尽力してきた。

以上のように、同教授は、国内外の植物科学の研究の発展および教育に尽くし、その功績はまことに顕著である。このたびの紫綬褒章受章は、その功績が高く評価されたことによるものであり、誠に喜ばしいことである。

(大学院理学研究科)

話題

日本学術振興会研究拠点事業「インドシナ地域における地球環境学連携拠点の形成」第2回国際シンポジウムを開催

ベトナムのカントー大学にて、9月27日(土)、日本学術振興会研究拠点形成事業「インドシナ地域における地球環境学連携拠点の形成」第2回国際シンポジウムを、本学地球環境学堂・学舎、ベトナムのハノイ理工科大学、カントー大学と共同で開催した。

本プログラムは、近年急激な変容を遂げるインドシナ地域の環境問題解決のため、学際的・国際的協働体制を確立することを目的として、地球環境学堂・学舎が平成25年度より3年間実施するものである。これまで緊密な連携をしてきたベトナムのハノイ理工科大学、フエ大学、ダナン工科大学をインドシナ地域のハブ拠点と位置づけ、当該地域における地球環境学連携拠点を形成し、準ハブ拠点となるタイ・コンケン大学、ラオス・チャンパサック大学、カンボジア・王立農業大学の3大学を含む6大学との連携により、教育・研究・実践の情報共有化、学際・国際的な人材交流の促進と共同研究の推進に資するインドシナ広域ネットワークの構築を目指すものである。

今回のシンポジウムでは、本学や拠点大学の教

員、学生の他、本プログラムに関心を持つベトナム国内やアジア地域の大学関係者、日本の他大学関係者や企業関係者、国際協力機構(JICA)ベトナムオフィス、日本学術振興会(JSPS)バンコクオフィスなどを含め、合計約90名が参加した。

シンポジウムでは、まず今回の主催である本学、ハノイ理工科大学およびカントー大学を代表して、藤井滋穂 地球環境学堂・学舎長、Huynh Trung Hai ハノイ理工科大学環境科学工学科長、Ha Thanh Toan カントー大学学長より挨拶があった。その後、本拠点事業の進捗状況説明に続き、教育・研究・実践の国際連携に関する講演、各大学の事例報告、企業の取り組み紹介、研究活動紹介等がなされ、活発な議論が行われた。

本プログラムは、毎年1回全体シンポジウムを開催することとしており、平成25年度に第1回目としてフエ大学と共同開催した。また第3回目は平成27年度にダナン工科大学と共同開催予定で、共同研究の促進、教育連携の実現化など逐次議論していくこととしており、今後の連携発展が期待される。



シンポジウムの集合写真

(大学院地球環境学堂・学舎)

花山天文台で野外コンサートを開催

花山天文台が昨年、京都市の「市民が残したい“京都を彩る建物や庭園”」として選定されたことを記念して昨年9月に開催された、世界的な音楽家の喜多郎さんによる野外コンサートが、今年は仲秋の名月の頃、10月4日(土)に開催された。



喜多郎さんの演奏風景

今回も奥様でキーボード奏者の高橋恵子さんにお越しいただいたほか、ホーメイ歌手の山川冬樹さんとアイリッシュハープ奏者小川由美子さんも応援団に加わり、素晴らしいパフォーマンスや演奏を提供いただいた。

コンサート当日は、幸い、台風の合間をぬって奇跡的な好天に恵まれ、時折朧月となる仲秋の名月を眺めながら、スタッフも含めて180人ほどの参加者が素晴らしいコンサートを楽しんだ。また、会場の周辺には小望遠鏡を設置し、月や星を望遠鏡で楽しみながらという、天文台ならではの野外コンサート

となった。

参加者からは、「当日の素晴らしい夕焼けやお月様、時が止まったような喜多郎さんの心に染み入る音曲など思い出します。その場の一員でいたことがうれしいです」、「とても素晴らしい内容で、演奏中には何度も涙が溢れるほど感動しました。コンサート全体の風景
有意義なイベントに沢山の友人と共に参加出来たことを、心から感謝しています」などの感想が寄せられた。



コンサート全体の風景



右から、コンサート終了時の小川さん、喜多郎さん、高橋さん、柴田天文台長

(大学院理学研究科)

「竹の環プロジェクト」を開催

桂キャンパスにおいて10月18日(土)に、竹林保全ボランティア活動「竹の環プロジェクト」が開催された。この「竹の環プロジェクト」は、桂キャンパスの竹林保全を通じて環境問題に取り組むボランティア活動で、本学、住友生命保険相互会社、京都モデルフォレスト協会および京都府が主催している。

当日はスタッフを含めて80名余りが参加し、秋の爽やかな陽気の中、午前中は竹林の間伐作業に汗を流した。午後からは伐り出した竹を使って竹細工に取り組み、参加者はプランターやフラワースタンド、



竹細工の様子

鉛筆立てなど、竹の特徴を生かすよう思い思いに工夫を凝らした竹細工を楽しむとともに、竹との親し

み方や豊かな恵みをもたらす竹林を整備することの重要性について理解を深めることができた。



参加者の記念写真

(大学院工学研究科)

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座「創造性と心の発達」を開催

教育学研究科附属臨床教育実践研究センターでは、毎年、深刻化する教育問題への取り組みの一環として、現代人のこころの理解に主眼をおいた公開講座を開催している。

今年度は、センター客員教授で精神分析家のインゲ・ワイズ氏を講師として、10月19日(日)の午後1時から、百周年時計台記念館国際交流ホールⅠで行い、心理臨床家や医師、教育関係者、学生など約50名の参加があった。

講演では、精神分析実践において創造性がどのような形で現れ、いかに治療的に重要な役割を果たすかについて、ワイズ氏の精神分析の実践例を通して語られ、また、創造性の獲得が人間の心の発達において、いかに本質的で重要かということについても解説された。さらに、こうした創造性と、たとえば日本の寺社仏閣の庭園にみられるような、芸術的な創造性との関連についても語られた。指定討論においては、精神分析や心理療法における治療者と患者の関係性について創造性の観点から議論され、また脳の機能と創造性の関連についても触れられた。精神分析実践の経験が豊富な講師の語り口に接した参



熱心に耳を傾ける受講者

加者からは、「人間の心や生活にとって創造性がいかに大切か分かった」、「自分の普段の臨床実践についても、創造性という観点から理解を深めることができた」などの感想が寄せられ、貴重な機会となった。

本講座は例年参加者から大変好評を得ており、来年度以降も、現代社会の複雑なこころの問題を理解するための視点を一般市民に向けて広く提供できる場となるよう、開催していくことを考えている。

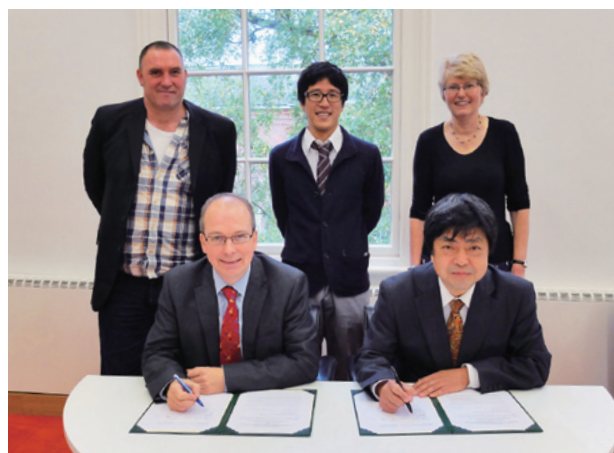
(大学院教育学研究科)

地球環境学堂・学舎がレスター国立大学地理学部との部局間学術交流協定を締結

10月20日(月)、英国レスター国立大学において、藤井滋穂 地球環境学堂・学舎長とDave Hall 英国レスター国立大学教務部長が、Susan Page 同地理学部長・教授、Alexis J. Comber 同教授、Michael Green 同国際課博士、堤田成政 地球環境学堂助教(レスター大学客員研究員)の立会いのもと部局間学術交流協定の調印式を行った。

レスター国立大学は英国中央部レスター市に位置し、1921年に設立され32の部局を有する総合大学である。イギリス大学ランキングTop20内にランキングされ、研究主導のリーディング大学として注目されている。中でも地理学部は地理情報科学分野をはじめ、多くの著名な研究者が世界各国で研究活動を繰り広げており、今後の研究連携が期待される。

本年度は6月1日より堤田助教が日本学術振興会(JSPS)「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム：フューチャー・アースに貢献する国際研究ネットワーク・ハブ構築」により客員研究員として地理学部に在籍し、地理情報科学分野での研究に従事している。フューチャー・アース(FE)とは、国際科学会議が国連環境計画、国連大学、国際社会



調印式の様子

科学協議会、ベルモントフォーラムと共同して立ち上げた新たな研究イニシアティブである。FEは、これまで自然科学分野を中心に実施されてきた地球観測研究と、人文・社会科学分野等の研究を融合させ、持続可能な未来を築くための知見を得ることを目標としている。

今後FEの理念に沿った国際共同研究と同時に、研究者・学生交流の推進が期待される。

(大学院地球環境学堂・学舎)

「フューチャー・アースに貢献する国際研究ネットワーク・ハブ構築」のシンポジウムを開催

地球環境学堂は、ベルギー、ルーヴェン・カトリック大学にて、日本学術振興会(JSPS)による「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」に採択された課題「フューチャー・アースに貢献する国際研究ネットワーク・ハブ構築」(主担当研究者：地球環境学堂・勝見 武、平成25年度～平成27年度)のシンポジウムを10月23日(木)、24日(金)に開催した。

本採択課題では、地球環境学堂と、特に欧米の大学研究機関とのネットワークを構築すること、最終的には本大学院がそのハブとなって、フューチャー・アースの目標に貢献することを目指すものである。

国際ネットワーク構築のため、本大学院にて選考



集合写真

された約10名の若手教員や博士課程学生が約1年間、様々な共同研究先に派遣されはじめており、本シンポジウムは、派遣された若手研究者、共同研究先の

受入研究者、担当研究者らが一堂に会する最初の手合として、欧州の中心に位置するベルギーにて開催された。

シンポジウムは藤井滋穂 地球環境学堂・学舎長の開会の挨拶に続き、勝見教授から本プログラムの説明があった。続いて、ルーヴェン・カトリック大学のRaf Dewil 教授およびLise appels 教授からの講演があった。その後、本採択課題に関連する受入研究者、派遣研究者および担当研究者が各々の研究発

表を行い、それらを交えながら、アジア地域を中心に培ってきた地球環境学の学際的な国際共同研究・国際連携の実績、ノウハウ、組織体制をベースとして、欧米等先進諸国に焦点を絞り、国際共同研究ネットワークの強化・拡張をどう構築していくべきかについて活発な議論を交わした。最後にRaf Dewil 教授より閉会の挨拶があり、盛会のうちに幕を閉じた。

(大学院地球環境学堂・学舎)

タイ王国 Mahidol 大学工学部長と 5 学科代表が本学を訪問

10月22日(水)にタイ王国Mahidol大学のWorawit Israngkul工学部長と 5 名の学科代表(Dr. Songpol Ongwattanakul 教育工学科 副学科長, Gunn Kanatarntip 財務教育学科 副部門長, Dr. Bovornlak Oonkhanond 化学工学科長, Dr. Somchai Pathomsiri 土木環境工学科長, Dr. Supphachan Rajsiri 生産工学科長)が本学を訪問された。百周年時計台記念館の迎賓室にて、森 純一 国際交流推進機構長より歓迎の挨拶が行われ、医学研究科、地球環境学堂・学舎との部局間交流協定を基にしたさまざまな交流について意見交換を行った。続いて、地球環境学堂・学舎長室に移動し、柴田昌三 教授、宇佐美誠 教授、小林広英 准教授、乾徹 准教授、田中周平 准教授、原田英典 助教、学術研究推進室の藤枝絢子 URAとディスカッションを行った。最初に柴田教授から地球環境学堂の教育・研究の概要について説明があり、特に修士課程において3か月以上のインターンシップをカリキュラムに入れている点などに興味を示されていた。続いて田中准教授からMahidol大学のSuwanna Kitpati 助教との教育・研究交流の実績について報告があった。藤井滋穂 学堂・学舎長とともに平成19年から継続しているインターンシップを通じた修士・博士学生の交流とタイ王国における微量汚染化学物質に関する共同研究に興味を持たれ、このようなインターンシップを他の研究室においても始めていきたいとの好意的な意見があった。さらに小林准教授からダブルディグ



迎賓室での集合写真

リーを含めたアジアにおける大学院教育の計画に関する説明がなされ、来年度以降の連携について前向きな意見をいただいた。

午後には桂キャンパスに移動し、工学研究科都市環境工学専攻の教員との交流会が催された。最初には大津宏康 工学研究科副研究科長から歓迎の挨拶があり、タイ王国における交流実績などが紹介された。続いて、伊藤禎彦 教授から都市環境工学専攻の教育・研究の概要が説明され、その後、水野忠雄 講師、島田洋子 准教授、西村文武 准教授、上田佳代 准教授、松岡 譲 教授、藤森 崇 助教から研究内容の紹介が行われた。最後に都市環境工学専攻研究室の実験室を見学され、熱心な質問が交わされた。今後のMahidol大学との交流推進に有益な一日となった。

(大学院地球環境学堂・学舎)

宇治キャンパス公開2014を開催

宇治キャンパスでは、10月25日(土)、26日(日)に「京都大学宇治キャンパス公開2014」を開催した。毎年秋に行うこのイベントは、宇治キャンパスでどのような研究を行っているかを一般の方に広く知ってもらい、大学の研究活動への理解を得るとともに、科学の魅力について考えてもらうことを目的として開催している。18回目となる今年は「気になる科学がきっとある！」をテーマに、どなたにも楽しんでいただけるよう、そして科学に興味を持っていただく一つのきっかけになればと多くの公開ラボ等を実施した。

宇治おうばくプラザきはだホールで行われた特別講演会では、「洪水災害とダムの役割～世代を超えて上手に使う・役立てる～」(角 哲也 防災研究所教授)、「おなかのなかの環境を覗いてみよう！」(谷 史人 農学研究科教授)、「これからどうする？人工衛星に接近する宇宙ごみと地球に接近する小惑星」(山川 宏 生存圏研究所教授)と題して行った。

また、24日(金)にはプレイベントとして工学研究科の公開シンポジウム、25日には防災研究所、26日には化学研究所および生存圏研究所の公開講演会を行った。

公開ラボでは、災害時に生き延びる方法等のクイズに答え、防災グッズをゲットするという「サバイ

バルクイズ」や、光学顕微鏡と電子顕微鏡を使って身近な食べ物の構造観察を行う「ミクロな目で見ると身近な食べ物」など、普段は見ることはできない研究施設や実験室の公開などが行われ、たくさんの最先端研究が紹介された。



公開ラボ「身近にあるプラズマの世界
—蛍光灯から太陽まで—」



公開ラボ「飛ばせ気球！見つめる地球！
—空を診察して豪雨の予測に役立てます—」



サバイバルクイズの様子

地域のイベントとして、どなたでも楽しめる工夫をこらしたプログラムに、毎年足を運んでくださる方も増え、宇治キャンパスおよび宇治川オープンラボラトリー会場あわせて3,300名を超える参加者が秋の1日を楽しんだ。

(宇治地区事務部)

宇治キャンパスで総合防災訓練を実施

宇治キャンパスでは10月29日(水)に、宇治市東消防署の協力のもと、宇治市で震度6弱の地震(南海トラフ地震)が発生したことを想定した、総合防災訓練が行われた。

これは京都大学危機管理計画(地震編)に対応する訓練に、地震時の安否確認・情報伝達の要素を加え、負傷者や火災の発生等、現実的な想定のもと、組織的な避難誘導・情報伝達を総合的にシミュレーションするものとなっている。教職員で組織する自衛消防地区隊を中心に、その他の教職員、学生などキャンパス全体で総勢1,000名以上が参加し、初期消火や安否情報伝達、避難誘導、負傷者の救護、また避



消火器操作訓練

難状況の集計等、様々な場面が設定され、参加者は、各自の役割を確認しながら実践した。

避難完了後は、宇治市東消防署の指導による消火器操作訓練も行い、参加者は熱心に説明を聞き、実際に消火器を手にとって体験した。

また、今年度の防災訓練では、宇治市東消防署によるはしご車を使用した残留者(教員)救助活動も行われ、実践さながらの緊張感の中、貴重な体験を得た。

訓練終了後には、宇治地区世話部局長の岸本泰明 エネルギー理工学研究所長の挨拶、浦杉利彦 宇治市東消防署長からの講評の後、消防署の方と自衛消防地区隊を中心とした参加者との意見交換も行われ、盛況のうちに終了した。



はしご車を使用した救助訓練
宇治市東消防署長からの講評の後、消防署の方と自衛消防地区隊を中心とした参加者との意見交換も行われ、盛況のうちに終了した。

(宇治地区事務部)

平成26年度総長杯(卓球大会)を開催

11月14日(金)に総合体育館(地下1階卓球場)において、平成26年度総長杯(卓球大会)が行われた。当日は寒さを感じる気候であったが、昨年よりも2チーム多い15チームが優勝を目指し、寒さを吹き飛ばすほどの熱戦を展開した。試合の行方を見守る同僚も、1球1球に一喜一憂しながら声援を送り続け、その声援に応えるべくプレーヤーはポイントを重ね



優勝した「DMJ OB」チーム

ていった。終始おおいに盛り上がりを見せた大会の決勝戦は、医学部附属病院チーム同士の対決となり、日頃の練習成果を存分に発揮した「DMJ OB(代表者：小椋淳平)」チームが、「放射線部(代表者：梶迫正明)」チームを3対0で下し、見事に優勝した。試合終了後の表彰式では、山崎宏記 総務部人事課福利厚生室長より優勝杯、表彰状、賞品が授与された。



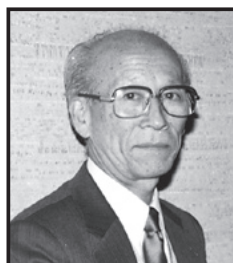
準優勝した「放射線部」チーム

(総務部)

訃報

このたび、黒岩澄雄^{くろいわすみ お}名誉教授、溜池良夫^{ためいけよし お}名誉教授、井上雄三^{いのうえゆうぞう}名誉教授、尾形幸生^{お がたゆき お}名誉教授、岸本兆方^{きしもとよしみち}名誉教授、芦田和男^{あしだ かず お}名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

黒岩 澄雄 名誉教授



黒岩澄雄先生は、10月6日に逝去された。享年88。

先生は、昭和28年3月東京都立大学(現、首都大学東京)理学部を卒業、同35年3月東京大学大学院生物系研究科博士課程を修了された。昭和36年10月東京大学理学部助手を経て、同40年4月京都大学理学部附属植物生態研究施設助教授、同48年10月同教授に昇任、同50年4月より同施設長(任期2年)に通算4期就任された。平成2年3月京都大学を停年退官、京都大学名誉教授の称号を授与された。

退職後は学校法人(創志学園と神戸創志学園)の理事、愛媛女子短期大学副学長を務め、私学の発展にも貢献された。

植物生態研究施設は、平成3年4月に改組により

廃止され、同時に発足した生態学研究センターの母体的一部分となったが、昭和55年日本生態学会総会での「生態学研究施設設立について決意表明」以来、先生は当生態学研究センター設立に大きく貢献された。研究面においては、Monsi & Saeki(1953)の群落光合成モデルを最も良く理解し、草本群落から縞枯山(長野県)の針葉樹林などを対象とし、植物の物質生産の研究分野の発展に大きく貢献された。特に葉層の3要素(個葉の分布、傾角、方位)と日射の2要素(入射角、強度)から植物個体の光合成量に与える影響の研究を、理論と実験の両面から追求された。また縞枯山の針葉樹林では、個体サイズと物質生産の関係と、森林の動態(樹木個体の成長や枯死)とを結びつけた先駆的な研究をされた。これらの業績により昭和54年度日本農業気象学会賞が授与された。

(生態学研究センター)

溜池 良夫 名誉教授



溜池良夫先生は、10月16日逝去された。享年93。

先生は、昭和21年京都帝国大学法学部を卒業された後、ただちに法学部助手に採用され、同助教授を経て、同36年京都大学法学部教授に就任された。昭和60年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。この間、昭和43年3月から同45年3月まで本学評議員として、学内行政に尽力された。本学退官後は、平成6年3月まで龍谷大学法学部教授を務められた。

先生は、国際私法と両性平等など、国際家族法を

中心とする国際私法および国籍法の研究において、諸外国の立法・判例・学説の比較法的検討を基礎とした重厚かつ緻密な議論を展開され、この分野におけるその後の学問的発展の出発点となる業績を上げられた。また、立法においても、平成元年法例改正と昭和59年国籍法改正に際しては、それぞれ法制審議会国際私法部会委員、同国籍法部会委員として、中心的役割を果たされた。さらに、京都家庭裁判所家事調停委員および参与員、司法試験考査委員などを歴任され、国際私法学会理事長、国際法学会理事を務められた。

(大学院法学研究科)

井上 雄三 名誉教授

井上雄三先生は、11月1日逝去された。享年94。

先生は、昭和21年9月京都帝国大学農学部農林化学科を卒業後、同26年10月より京都大学農学部助手に採用され、

同32年10月化学研究所へ移られた後、同33年4月京都大学より農学博士の学位を授与された。昭和37年1月化学研究所助教授、同48年3月同研究所教授に昇任され、植物化学研究部門を担当された。昭和58年4月1日停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。

先生は、永年にわたり天然物化学、有機立体化学、生物有機化学の研究と教育に邁進され、不斉合成のパイオニアの一人として、天然物の生理活性を有機立体化学の観点から深く追究された。特に、除虫菊の殺虫成分であるピレトリン類の殺虫活性が光学異性に顕著に支配されていることを明らかにされ、これを基盤とするピレトリンの化学は、今日の合成ピ

レスロイド系殺虫剤開発の基礎を築き、我が国の殺虫剤工業会の発展に指導的役割を果たされた。これらの業績により、昭和34年4月、社団法人日本農芸化学会より農芸化学賞を受賞された。また、当時、黎明期にあった不斉合成について、その重要性和将来性を看破され、カルベノイドを用いた数々の不斉シクロプロパン化反応とその立体制御など、先駆的研究を多数遂行された。その後、先生が予見されたとおり、不斉合成が有機化学における一大分野に発展した。また、先生は、酵素反応をモデルとする不斉反応にも取り組まれ、アルコール脱水素酵素に匹敵する立体選択性を有するモデル化合物の開発に成功された。これらの研究成果は生物有機化学の発展に大きく貢献された。

先生は、教育の面においても優れた指導者として実力を発揮され、多方面における人材育成に尽力された。これらの一連の教育研究活動、学会活動により、平成6年勲三等瑞宝章を受けられた。

(化学研究所)

尾形 幸生 名誉教授

尾形幸生先生は、11月3日逝去された。享年65。

先生は、昭和46年3月京都大学工学部工業化学科を卒業、同48年3月同大学院工学研究科修士課程を修了、同50

年4月同博士課程に進学し、同56年5月に京都大学工学博士の学位を取得された。

昭和57年3月名古屋工業大学工学部助手を経て、平成元年4月京都大学原子エネルギー研究所助教授、同7年4月に教授に就任された。平成8年5月には組織改組によりエネルギー理工学研究所となり、エネルギー利用過程研究部門を担当された。また、平成20年1月より同25年3月まで研究所長として所内

の管理運営に努められ、研究所の発展に尽力された。同年3月定年により退職され、同年4月に京都大学名誉教授の称号を授与された。

先生は一貫して電気化学の分野で活発に研究を行われ、特に、半導体電極の表面微細構造や光照射にもとづく電気化学反応の制御に関して重要な成果を残された。また、シリコンを電極とした電気化学反応によるナノ・マイクロメートルスケールでの多孔質構造制御など多様な表面微細構造形成法を開発され、電気化学的表面処理にもとづく構造形成機構の解明に貢献するとともに、それらの工学的応用についての展望を含めた優れた研究成果を公表し、多孔質半導体の電気化学の発展に大きく貢献された。

(エネルギー理工学研究所)

岸本 兆方 名誉教授

岸本兆方先生は、11月7日逝去された。享年87。

先生は、昭和26年京都大学理学部を卒業、同31年理学研究科地球物理学専攻を修了、理学部講師(非常勤)を経て、

同32年4月理学部助手に採用された。その後、昭和33年4月防災研究所助教授に昇任、同39年1月理学部助教授へ転任、同40年4月防災研究所教授に昇任された。地殻変動研究部門、微小地震研究部門、地震予知研究センターの各主任を歴任される傍ら、鳥取微小地震観測所、上宝地殻変動観測所、北陸微小地震観測所の各施設長を務められ、平成3年停年退官し、名誉教授の称号を授与された。

先生のマントル構造に関する13° および20° 不連

続面の研究は、1950年代後半の地震学における我が国の誇れる業績の一つである。また、先生は微小地震の観測研究においても先駆者的な役割を果たされ、山崎断層テストフィールド計画では研究代表者として地震、地殻変動、地質、地形、地球電磁気、地下水などの研究分野の共同研究を積極的に推進された。

教育面では、大学院理学研究科の指導教官として多くの大学院生の教育と研究指導を行い、後進育成に努力された。

学外では、地震予知連絡会、日本学術会議地震予知小委員会、測地学審議会などの委員を務められ、地震予知研究計画の立案・審議やその推進に尽力された。

(防災研究所)

芦田 和男 名誉教授

芦田和男先生は、11月13日逝去された。享年85。

先生は、昭和27年3月京都大学工学部を卒業、直ちに建設省(現国土交通省)土木研究所に奉職、同36年6月に京都

大学工学部助教授に採用され、同年12月に工学博士の学位を授与された。昭和37年4月に防災研究所助教授に配置換になり、同40年4月教授に昇任され、河川災害研究部門を担当された。その後、昭和46年4月から退職されるまで砂防研究部門を担当され、防災研究所附属穂高砂防観測所長を務められるとともに、同56年防災研究所長ならびに京都大学評議員に任命された。平成4年3月停年により退官され、同年4月京都大学名誉教授の称号を授与された。

先生は、土木工学分野および砂防学、地球物理学、自然災害科学との境界領域において輝かしい研究業績を著すとともに、多年にわたって研究・教育に従事され、学生の指導、研究者の育成に尽くし、本学に多大の貢献をされた。また、学外でも土木学会理事、土木学会水理委員会委員長、砂防学会会長、自然災害総合研究班代表者、国際学会・会議各種委員の要職を務めるなど、学術研究の推進・環境整備に尽力された。さらに、国、自治体などの審議会、各種委員会においても重責を果たされた。これらの功績により、瑞宝中綬章、全国治水砂防協会赤木賞、土木学会著作賞、土木学会功績賞、日本河川協会河川功労者表彰を受けられた。

(防災研究所)